

校内別室での支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は小学校高学年から不登校の状況が続いている。中学校入学時は心機一転登校する意欲を高めていたが、新しい人間関係をつくることに不安を感じ、自信をもてなくなってしまった。徐々に登校日数が少なくなり、中学校でも再び不登校になった。

具体的な取組

○「好き」を基本とした活動の促し

当該生徒は「○○しなくちゃダメ」と考えてしまう傾向が強く、できないことに自信を失ってしまうため、当該生徒の「○○したい」という気持ちを引き出し、好きなこと・興味のあることを基に校内別室で取り組む活動を考えている。

○生徒同士をつなぐ関わり

当該生徒の興味・関心を基に校内別室を利用する他の生徒と関われる活動を考え、支援員が関係をつなぐ役割を果たしている。「○○さん猫が好きなんだって」、「知らない種類もあるよね」、「調べてみる？」等、活動につなげられる小さな糸口を常に意識して働きかけている。

○共同制作への参加の促し

当該生徒は手先が器用であり、校内別室に掲示する季節ごとの掲示物等を支援員と一緒に製作した。他の利用生徒とアイデアを出し合いながら、コミュニケーションを図る機会にもなっている。



○生活経験の保障

大掃除など、学校全体で取り組む行事について、校内別室でも同様に取り組み、生活経験を保障している。

当該生徒は、支援員や他の校内別室利用生徒と一緒に別室を掃除した。

役割分担し、助け合って掃除に取り組んだことで、明るい表情が見られた。

成果

校内別室の利用開始後、登校状況が改善し、徐々に別室で過ごす時間も長くなった。別室で、支援員や他の利用生徒と関わりながら「できた」を繰り返すことで少しずつ自信を付けていった。

課題

担任・SCとの連携や共通理解を図るとともに、対象生徒が通院する医療機関等との連携を図る。

コミュニケーションの充実を図り、自信をもたせる指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときから不登校傾向があった。中学校入学後、安定して登校はしていたが、夏期休業前の7月頃から欠席が増え、次第に登校できなくなった。友人関係や周囲とのコミュニケーションに不安を抱えている。また、学習面の不安もあり、登校に対して前向きな考えがもてなくなった。

具体的な取組

○学習支援・教育相談の実施

特別支援教室の教員と連携し、校内別室につないだ。支援員と個別学習に取り組み、基礎学力の定着を図った。

また、週に1度SCと面談し、カウンセリングを実施した。



○小集団活動の実施

個別の校内別室の利用が安定してきたため、校内別室での小集団活動につないだ。学習内容の教え合いや学習以外（カード・パズル）の活動に取り組む中で、周囲とコミュニケーションのきっかけを増やした。

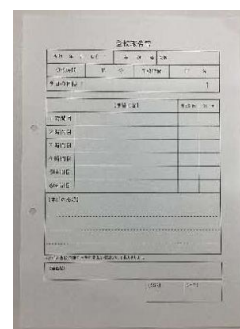


○生徒同士の関わりの機会

学級の友人に別室まで給食を運ぶことを依頼した。また、昼休みにその友人を校内別室に呼び、交流の機会を設けた。数か月続けると、自ら学年のフロアまで上がり、給食を受け取ることができるようになった。現在では、3、4人の学級の友人で給食の受け渡しを行い、短時間だが交流する時間を設けている。

○生徒自身が過ごし方を決定

支援員と一緒に、一日の目標・予定等を立てることで、自己決定の機会としている。目標を取りまとめる個人ファイルは、自分で職員室に取りに行き、様々な教員と交流する機会を設けている。



成果

週4日、校内別室登校を継続できている。また、進路に対して前向きに考えられるようになり、上級学校の見学ができた。また、定期考査も別室で全ての教科を受験できた。2月の宿泊行事参加に向けて前向きに準備を進めている。

課題

校内別室につないだ後の支援として、教室復帰に向けた働きかけを継続する。

校内別室指導支援員による不登校未然防止の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 1 年生で、入学当初は通常どおり登校していた。7 月頃、同じクラスの友人とささいなことでトラブルになり、解決後も教室に入ることを渋るようになった。

具体的な取組

○校内別室の活用

パーティションで仕切り、個別で学習に集中できるように教室環境を整備している。

担任に各教科の課題を準備してもらい、毎時間取り組む教科を当該生徒自ら考え、取り組んでいる。

生徒の一日のスケジュールをホワイトボードに記入することで、全教職員が生徒の状況を把握できるようにしている。

○学級との関わりの維持と教室復帰支援

学級の生徒に校内別室まで給食を運んでもらうように依頼し、級友との触れ合いの機会としている。

教室に行けそうな教科は校内別室から支援員が付き添い、配慮しながら参加した。

集会や行事の際に、体育館の後ろで聞いたり、オンラインで参加したりしながら、学級・学年の一員だと意識付ける。

○オンライン授業の設定

英、数、国はオンライン授業に参加できるように設定している。

学習支援員が巡回し、当該生徒が困っている教科のサポートを行っている。



○毎週 1 回の特別支援委員会の実施

週 1 回、特別支援委員会を行い、当該生徒の状況を確認している。

養護教諭からの情報や各学年主任からの情報を基に、SCやSSWにいち早くつなげることで、本人の不安や不登校の原因などを確認し、サポートしている。

成果

校内別室指導支援員の支援により、別室に安定して登校できるようになり、不登校を未然に防止できている。当該生徒は、毎日登校しており、参加できる教科は教室で授業を受けられるようになってきている。

課題

教室で参加できる教科を増やせるように働きかけるとともに、支援に当たる教員の不登校支援の意識を高めていく。

不登校生徒に対する校内支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生に在籍している。中学校 1 年生の途中から、進学時の不
適応により、学校に継続的に登校することができなくなった。中学校 2 年生に進級後
も不登校が継続し、家庭訪問等の支援も拒否する状況だった。

具体的な取組

○不登校生徒に対する支援体制の確立

週 1 回、支援会議（教育相談部会）を
行い、利用生徒に関する情報共有を密に
行っている。

そこで特別支援教育コーディネータ
ーを中心として S C と連携を行い、
個々の生徒への個別の対応を検討して
いる。

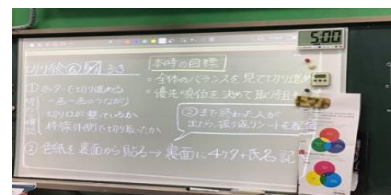
○S C と連携した支援

校内別室に登校している生徒や、学
習・対人関係への不安を抱える生徒やそ
の保護者に対して、学年教員や別室担当
教員と相談の後、原則、定期的な S C 面
談を設定している。

そこで家庭での状況や生徒の困り感、
特性を把握・分析し、支援に活用してい
る。

○教室復帰を目指した学習支援

校内別室に登校する生徒に対して、学
年委員が作成した授業の板書やワークシ
ート、明日の時間割を、授業支援システ
ムを活用して毎日担任から配信してい
る。



↑生徒に送る板書の一例

○個別の学習支援

生徒と保護者が希望した場合、別室で
の個別の学習支援を行っている。長く教
室で授業を受けておらず、板書画像だけ
での自主学習が難しい生徒に関しては、
一対一の学びが効果的であり、学習に取
り組めた達成感にもつながっている。

成果

校内での支援体制の確立や不登校生徒に対する学
びの保障を行い、別室でも学習できる環境を整える
ことができた。継続的な個別の支援を行うことで、当
該生徒の出席日数の増加や、学力の向上を見取るこ
とができた。

課題

生徒一人一人に求められる
支援が多様化しているた
め、それらに対応するた
めの支援員等の配置を進め
る。

校内別室の活用について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校3年生の時に転入し、現在小学校4年生である。転入当初から休みがちで欠席が多かった。睡眠障害があり、調子が悪い日は登校時間になっても起きられないことが多い。保護者の体調が悪く、遅刻の場合に学校まで送ることができないため、欠席が増えてしまっている。

具体的な取組

○安心して過ごせる場所作り

「何をしても何をしなくてもいい」という理念の下、校内別室では安心して過ごせる場所づくりを目指している。友達と一緒に活動するスペースの他に、一人で過ごすことができるパーティションで区切った場所も作っている。



○グループ活動を通したコミュニケーション

清掃の時間に、利用児童同士が協力して掃除を行っている。また、広い机で活動することで、他学年の友達との会話が増え、タブレット端末の操作方法などを教え合う場面が増えた。また、仲間に会うことを楽しみにする様子が見られた。

○電話や訪問による登校支援

支援員は、家庭と子供の支援員を兼務しており、朝登校できない日も中休みに迎えに行くことで、登校できる日が増えた。また、迎えの際に、保護者から家庭の様子を聞くことができている。

○タブレット端末を使った連携・情報共有
校内別室の利用者や利用状況等を、チャットを使いリアルタイムで共有している。給食の喫食場所や教室に戻るタイミング・行事の練習への参加等を担任はすぐに確認することができる。また、支援員は一日の記録をクラウドで共有し、関係者が対応状況を把握することができる。

成果

安心して過ごせる場所があることで、欠席が続いていた当該児童の学校へ登校意欲を喚起できた。また、支援員が迎えに行くことで登校日数も増えた。

課題

教室での授業の進度が大幅に遅れることがないよう、学習への意欲を高めていく。

校内別室を活用した不登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年頃から不登校傾向にあった。中学校入学後、学級内の友人とコミュニケーション上のトラブルが重なったことで、5月から不登校となり、校内別室の利用を開始した。

具体的な取組

○自分で決める一日の予定

当該生徒は、登校後、一日の予定を自分で決め、ホワイトボードへ記入している。他の生徒の予定も参考にしながら「自分もこの教科は教室へ行こうかな」などと話しながら



名前	日	月	火	水	木	金	土	日
3					SSR	自習		
4	11:50	12:50	14:00			自習		
5						SSR		
6						自習		
7						SSR		
8						自習		
9						SSR		
10						自習		
11						SSR		
12						自習		

予定を立てている。

○ICT機器を活用した学習支援

タブレット端末を活用し、数学や英語のeラーニングに取り組んでいる。別室だけでなく、家庭でも個別学習に取り組めるようになった。また、問題に取り組んだ数や正答率が表示されることで学習のモチベーションの向上にもつながっている。

○小集団活動の実施

SCが支援者になり、当該生徒を含む希望者が参加する小集団活動を行っている。他の生徒と協力して別室壁面の掲示物の作成や互いを知るための活動を行った。

関係づくりができることにより、別室が安心できる場となっている。



○担任や友人との関わりの機会

担任の空き時間に別室で学習課題やプリントを受け取ったり、最近の様子を話したりしている。

また、給食を運んでもらう際や昼休みなどに学級の友人と話をすることで、教室へ戻ろうという意欲が高まっている。

成果

別室支援員や他の生徒との関わりを通して、校内別室が安心できる場所となり、自分で決めた週2日の登校は概ね達成できるようになった。

さらに、行事や特定の教科、給食などは学級に入っ

て活動できる場面が増えている。

課題

教室復帰を見据え、コミュニケーションのトレーニングを取り入れていく。

登校・下校時刻を自分で決め、生徒の体調等に合わせた校内別室での支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生である。真面目で周りの生徒に気を遣い過ぎてしまう様子があり、1 年生の 11 月頃から体調不良や明確な理由のない不安感を訴え、欠席が多くなり医療機関を受診した。2 年生になって校内別室登校を開始した。

具体的な取組

○今日の予定を確認

登校したら、何時間目に教室に行くか、給食は食べるか、何時間目まで別室で過ごすかを校内別室指導支援員が確認する。

無理強いせず、生徒のペースに合わせているので、学校生活を安心して送ることができている。

○学習支援

元教員（数学・英語・理科）の 3 名が校内別室指導支援員として支援に当たっている。

手厚い学習支援により、学習の遅れを心配することなく、意欲的に学習に取り組んでいる。



○実技教科の作品作り

実技教科の教員が校内別室で作品作りの指導を行った。

楽しく制作に取り組み、完成した作品を文化祭に展示したことで、生徒の自信につながった。

また、技術の授業にも参加することができた。

○医療機関との連携

学校での様子を定期的に保護者に報告し、体調不良時の対応の仕方など、医療機関と連絡を取る許可を得た。薬の副作用で眠くなる、不安からパニックになる、等の対応法を主治医から直接聞くことで、学校側も安心して生徒を見守ることができるようになった。

成果

当該生徒に多くの教職員が関わることによって、保健室休養や早退を我慢することなく素直に訴えられるようになった。学校が安心できる場所になり、登校日数が増え、滞在時間も延びてきた。

課題

校内別室が狭いため、気持ちを落ち着かせることが必要なときに場所を別途確保する必要がある。

校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生の後期から学習面での不安や生活リズムの乱れから教室に入ることができなくなった。

委員会活動など、学級内で積極的に役割を果たそうとする反面、その役割が負担となり、自信を喪失していた。

具体的な取組

○校内別室の環境整備

校内別室内に、パーティションで区切られたスペースを確保し、集団で過ごすことに苦手意識がある当該生徒が安心して過ごすことができるようにしている。周囲の視線を必要以上に意識することなく、学習に取り組むことができる。

○学習の支援

一人 1 台端末から A I 型学習ドリル教材などにアクセスし、当該生徒が自分自身のペースで学習を進められるようにしている。

また、可能な限り校内別室に教員が顔を出し、当該生徒の学習を個別に支援したり、課題を提供したりしている。

○在校時間の把握

登校時間を当該生徒と相談しながら設定している。今年度は、当該生徒の要望により、週 1 日のペースで休養日を設けている。また、職員室内のホワイトボードに登下校の時間を記録し、全教職員が把握できるようにしている。

SSルーム登校状況 9月20日			
	登校	下校	給食○×
生徒A	8:50		×
生徒B	9:00		○
生徒C	9:20		○

○小集団活動

校内別室では作業や学習以外に小集団での活動も取り入れている。

同じ校内別室の利用生徒同士でコミュニケーションを取る機会を設け、人間関係を構築する力を育成している。

成果

ほとんど登校できなかった状態から、週 2 日程度安定して登校できるようになった。

また、S C との面談や学習支援の体制を整えた結果、当該生徒の心理的な安定を図ることができた。

課題

学習の個性化を進め、学ぶ楽しさが実感でき、学習意欲の向上を図る支援の在り方を検討する。

校内別室の活用について

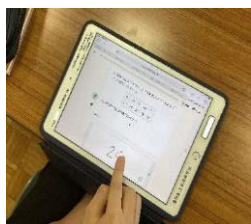
不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生に在籍している。小学校在籍時から不登校傾向が見られ、中学校 1 年生前期の途中まで不登校が継続していた。友人関係や学習の遅れに対する不安を感じている様子が見られる。

具体的な取組

○ICT機器を活用した学習支援

タブレット端末からクラスの授業をオンラインで視聴できるようにしている。また、個別最適化学習の一環として AI 型学習ドリル教材を活用している。



○教員と連携した学習支援

可能な範囲で、各教科担当の教員、校内別室指導支援員の指導可能な教科について、当該生徒に指導を行っている。

また、当該生徒が持参した参考書等の質問を受け付けることで学習面に関する配慮を行っている。

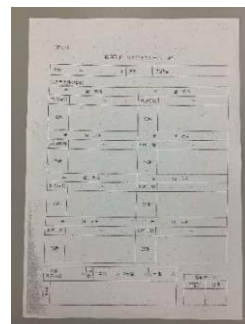
○自主学習の支援

個人で学習できる内容を中心に組みよう指導をしている。授業内での学習だけではなく、当該生徒は、自らが選んだ教材や内容に取り組む時間も大切にしている。



○日報を通した関係者間の情報共有

不登校担当教員と別室指導支援員、SC、養護教諭が、紙媒体の日報を通して当該生徒の日々の様子などを情報共有している。



成果

校内別室での支援により、安定した登校ができるようになり、結果として学校内でのつながりを保つことができている。担任だけではなく様々な教員とコミュニケーションを取り、教育相談等にもつながることができた。

課題

校内別室の居心地の良さから教室復帰の気持ちをもたせることが難しい。引き続き、学級復帰への働きかけを進める。

校内別室での個に応じた支援について

不登校児童

対象児童は小学校 1 年生の男子児童である。

就学相談で特別支援学級（知的固定）への入級を勧められたが、保護者の意向で通常の学級に入学した。学習に付いていけない、他の児童とのトラブルを起こすなどがあった。

具体的な取組

○校内別室での学習支援

当該児童の在籍学級の担任と連携し、現在学級で行っている学習や定着に課題がある学習（ひらがな、カタカナの読み書き等）のサポートを校内別室で行っている。

○コミュニケーションの場

校内別室を利用している他学年の児童と一緒に活動することで、思いやり、ルール等の社会性を身に付けられるように支援している。

○校内別室での情緒のコントロール

当該児童が興味・関心を示す折り紙、段ボール基地づくりなどの工作活動を通して、気持ちの解放と安定を図っている。また、完成した作品を支援者が肯定的に評価し、自己肯定感の向上につなげている。



○居場所づくり

校内別室指導支援員が中心となり、副校長なども関わりながら当該児童との信頼関係構築を図っている。

当該児童の保護者にも校内別室で過ごす様子を共有し、家庭でのコミュニケーションのきっかけにしてもらっている。

成果

校内別室が、当該児童の日常的な居場所になっており、不登校の未然防止を図ることができている。

また、情緒に係る支援により、在籍学級での不適応行動を軽減することができている。

課題

校内別室での安定した居場所づくりを継続するとともに、学習の定着を図り、当該児童にとって必要な支援先につなげる。

校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校在籍時に不登校の時期があった。中学校入学時は教室で周囲の生徒と関わりながら生活できていたが、徐々に疲れを訴え、登校を渋る日が増えてきた。

具体的な取組

○見通しをもった別室での活動

毎朝、保護者と当該生徒で登校時間やその日取り組むことを相談し、決めた目標どおりに活動するようにしている。

学校へのWEB連絡システムを活用し、家庭で決めた目標を保護者から学校に送ってもらい、家庭と学校で目標を共有して当該生徒の目標達成を支援している。

○本人のペースで進める学習

学習については、当該生徒と相談しながら、取り組めそうなことを支援員が提案し、過度な負担とならないよう留意しながら一緒に取り組むようにしている。



○給食を生かした他の児童との関係づくり

他学年の別室利用生徒との給食の時間は、生徒にとって楽しい時間となっている。各クラスに配膳される給食を、支援員と一緒に教室の近くへ行けるところまで取りに行き、受け取っている。教室前まで取りに行けた日は、クラスメイトや担任と会話することもある。

○他の別室利用生徒との交流

他の別室利用生徒と無理なく交流できるよう支援している。

当該生徒にとって、学校生活のよい刺激になっていると思われる。異年齢や趣味の異なる生徒同士の雑談は、緊張しつつも楽しい時間を過ごせている。

成果

当該生徒は、その時々で状況は変わるが、当該生徒や保護者の希望を確認しながら、ほぼ毎日、登校できている。

また、他の別室利用生徒との交流を通して、コミュニケーションを楽しく取ることができている。

課題

学習計画を立てることに課題があるため、支援員や学年教員がサポートしながら学習意欲の向上を図る。

入学時から登校できない生徒の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。小学校中学年から不登校状態であり、中学校でもほぼ登校できていなかった。発達に特性があり、医療機関への定期的な受診も継続している。

具体的な取組

○小学校から引き継いだ情報の活用

小学校からの情報を引継ぎ、入学前から支援方針を検討した。

入学後すぐに S C との面談を調整し、当該生徒及び保護者と面談を行い、校内別室を紹介した。

その後、見学・体験に参加し、5 月に正式に校内別室への登校を開始した。

○段階的な行事への参加

中学校 1 年生では学校生活に慣れることを目標とし、学校行事の見学を勧めた。最初は、遠くから見学したり、オンラインで見学したりと集団から離れての見学だったが、合唱祭や救命救急講習は体育館に入って見学ができた。2 年生では 1 年生で見学した行事に参加できるように練習から参加するように促した。

○学年と連携した行事への参加

行事に参加できるよう、事前に計画を立て準備を進めた。

職場体験に参加した際は、事前学習から校内別室でしおりの読み合わせ等を行い、その後のグループ学習に参加できるようにした。



○計画的な家庭訪問の実施

新学期が始まる 4 月、長期休業明けの 9 月は登校できなくなることが多いため欠席が 3 日続いた段階で必ず家庭訪問をした。それにより、欠席の長期化を予防した。また、夏季休業中も校内別室を開放し、登校を促すことで、学校との関係性を維持し、休業明けの不登校を未然に防止した。

成果

支援の結果、安定して登校することができるようになった。週の目標を前週に考え、目標どおりに登校できている。運動会のクラス旗の製作に携わり、当日の競技にも参加できた。現在は、学活や英語の授業を教室で受けることができている。

課題

保護者が不安定になると当該生徒の登校状況も不安定になるため、S S W 等を活用し、家庭を含めた支援体制を整える。